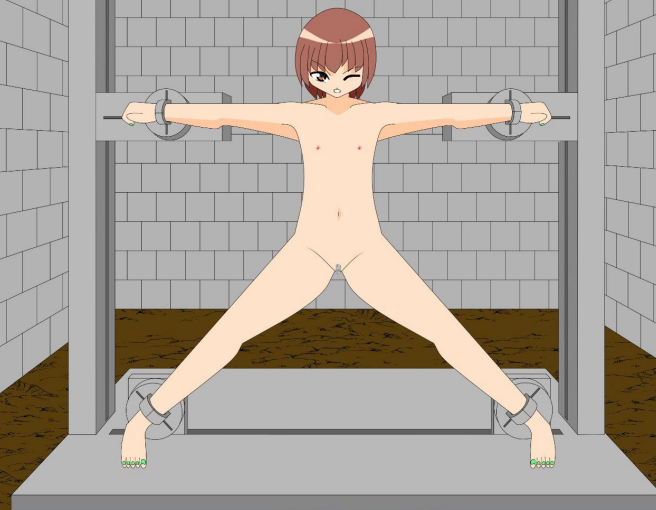


とある少女の危険なバイト3



制作:無眠
キャラ原案:RIC

薄暗いレンガ造りの部屋に、1人の少女が
手足を広げられた状態で横たわっていた。
彼女の名は新村ゆ菜美。
へたし文のキャミソールにマイクロミニのショートパンという
肌がむき出しになった格好で拘束されていた。
彼女に何があつたのか？ 時間は数日さかのぼる。



「最近全然バイトの子来ないね……。」

「そうねえ。いろいろやってみたけど、

どの子も1回しか続かないわね」

「そうだ。最近はやりのSNSで募集してみない？」

1人が思いついたように言った。全員の視線が集まった。

「それいいわね。身分証の提示絶対なし、

高額案件、ホワイト案件って書けば、だれか来るわね」

新村焰菜美は目が覚めると同時に異変に気付いた。
「何……これ……」
焰菜美は上を見上げた。両手に革手錠が巻かれ、鎖で釣り上げられていた。
慌てて焰菜美は両手を下ろそうとしたが、
鎖がきしむだけで両手を下ろすことはできなかった。
「あたし……バイトの面壁に来て……？ えっ？ またのバターン？」
心当たりがあるのか、焰菜美は辺りを見回した。

何……これ……？





「あら、起きたのね」

扉が開き、女連が入ってきた。

「えと……これってあれ？ あたしこれからエロいと言われるの？」

焰菜美の反応を見た女連は、顔を見合わせた。

「あら、よく分かったわね。これからあなたには、お姉さん達の相手をしてもらうわ」

焰菜美は女連を睨みつけた。これからあなたには、お仕置きするのが楽しみだわ」

「あらあら、この状況でそんな顔をするのね。お仕置きするのが楽しみだわ」

楽しんで女が言った。唇を噛み締めた焰菜美だったが、その表情はどうか物欲しそうにしていた。



焔菜美は鎖のついた革手錠に両手を巻かれた状態で吊るされていた。
きれいな腕やかわいらしいへそ、脂のつた真っ白な胸が惜しげもなくさらされていた。
焔菜美は大きく息をついた。
「あたし……これから何されるんだろ……」
不安そうにする焔菜美の耳に、部屋の外から足音が聞こえてきた。



「焰菜美ちゃん、気分はどうかしら？」
楽しんでに女が聞いていた。焰菜美は女達を視んだ。
「これからたっぷりお仕置きを受けるのに、本当にいい顔をするわね」
女達は焰菜美に歩み寄った。
「くっ、来るな……！」
焰菜美は弱々しい声で拒絶した。女達は笑みを浮かべた。

女達の手が焔菜美に向け伸びてきた。
女達の手がキャミソール越しに焔菜美の平坦な胸を、ショートパンツ越しに
焔菜美の最も大事な場所を、むき出しにらた
白磁のような太ももをもてあそび始めた。

「あーっっっ」
焔菜美から奇妙な悲鳴が漏れた。
「お胸ちとやい」
「太ももはんずムチのすべすべね」
「あっ、そこはっ！ ダメっ！」
一瞬戸惑いの声を出した焔菜美だったが、すぐに嬌声が始めた。



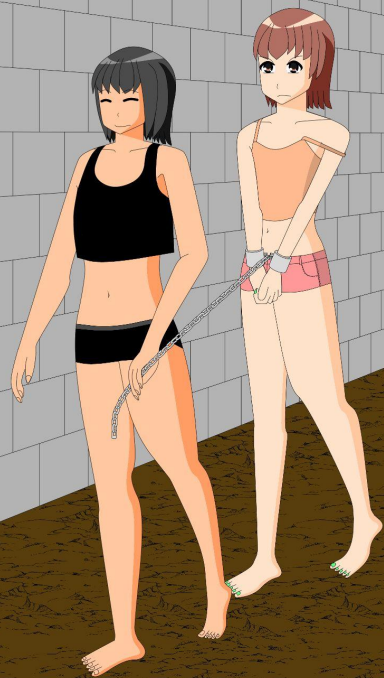


「あら？ 焰菜美ちゃん、感じているの？」
愉快そうに女が焰菜美に聞いてきた。
「感じてるわよ！ 何が悪いの……んっ！」
言い返そうとした焰菜美だったが、すぐに快楽が全身を貫いていた。
「愛撫されたくらいでそんなに声を上げていたら、これからどうするの？」
女の声は焰菜美に届いていなかった。

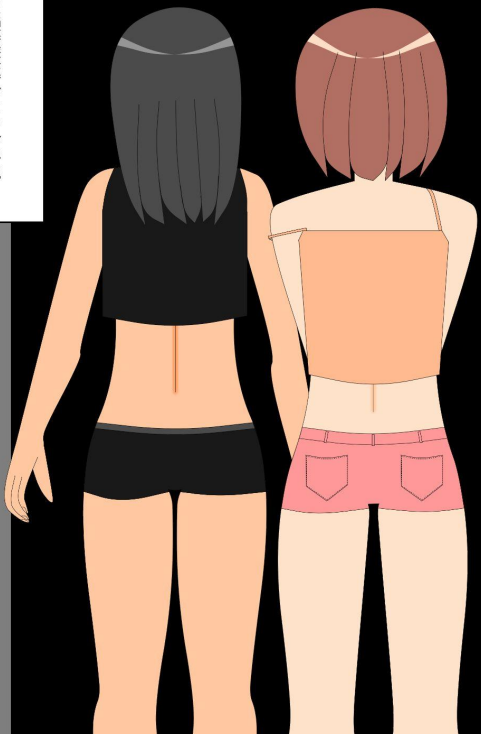
突如として、空気を切る音が聞えてきた。
焰菜美が何が起きたのかを考えようとする前に
焰菜美の体に激痛が走った。
「ああっ！」
悲痛な声が独房に響き渡った。
「焰菜美ちゃん、あんまり調子に乗っているよ、
きつーいお仕置きをするわよ」
にやけながら女が鞭を焰菜美に振り下ろした。
再び焰菜美に激痛が走った。
鞭打つ音と焰菜美の悲鳴はしばらくの間続いていた。



女が独房から焔菜美を引き出していた。
焔菜美の両手には革手錠がまかれており、
革手錠のつなぎ目には鎖がつけられていた。
女が鎖を引いた。焔菜美は激痛をこらえるかのよう、
片目をつぶり、歯を食いしばっていた。
「焔菜美ちゃん、今からお仕置き部屋に行くわね」
女の声が届いたのか、焔菜美は裸足の足を進め始めていた。



大きな部屋の前に畑菜美は連れてこられていた。
「入って、畑菜美ちゃん」
女が畑菜美を促した。畑菜美は女の背中を
睨みながら部屋へと入っていった。



「ふん……ふん……」
お仕置き部屋と呼ばれる大部屋で、焰菜美の苦しむ声が聞こえてきた。
焰菜美は三角木馬の背に乗せられていた。
三角木馬の鋭角が焰菜美の最も大事な場所に食い込んでいた。
ショートパンツと下着に守られているにもかかわらず、
焰菜美の最も大事な部分に激痛が走っていた。
「痛い……」
女の声が聞こえてきた。焰菜美はキッと女を睨みつけた。
「あらあら、木馬に乗せられているのにそんな顔をするのね」



あッ
あ
あッ

「婆美よ」

女達が焰菜美の両足首に鎖を付けた。

「あああああッ」

焰菜美の悲叫が大部屋に響き渡った。

「どうかして、焰菜ちゃん。自分の立場が分かったかしら？」

女の声は焰菜美に聞こえていなかった。

「鎖を！ 外して！」

焰菜美の全身から汗が噴き出していた。痛みを紛らわせるかのように、

焰菜美は必死に首を横に振っていた。

「無視するのね……」



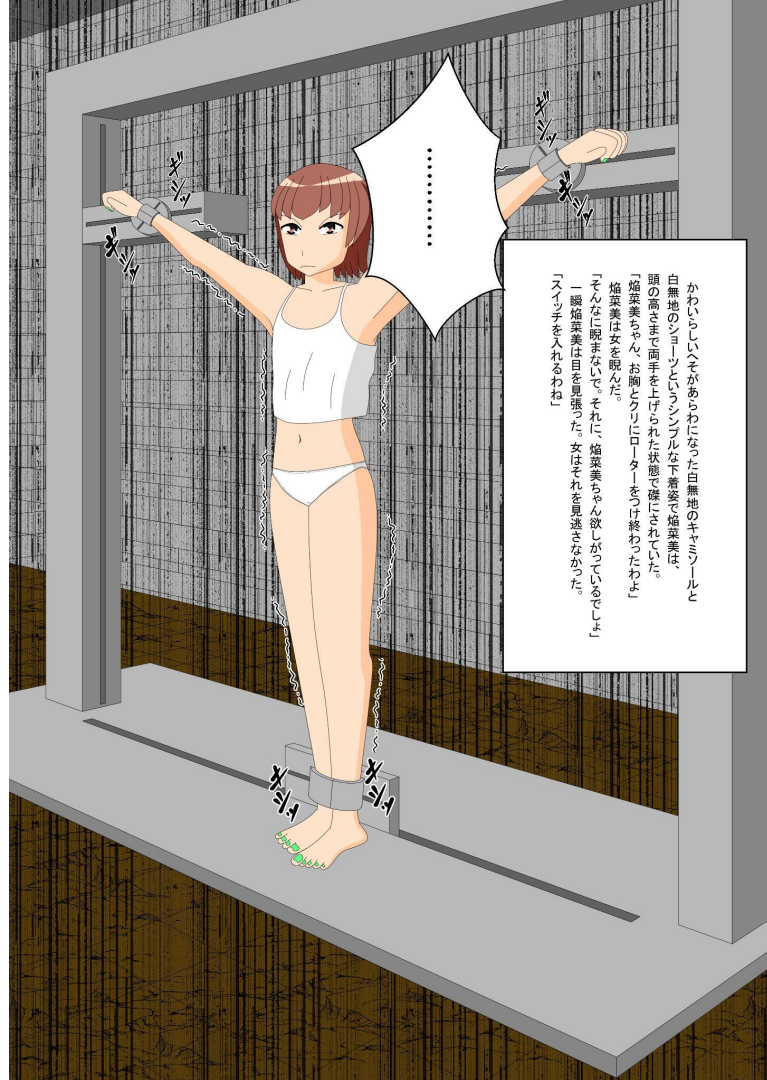
「お仕置きだ」
焰菜美の体に鞭が振り下ろされた。
「ああっ」
焰菜美の最も大事な場所に加え、上半身にも激痛が走った。
「たっぷり可愛がってあげるわね、焰菜美ちゃん」
女は再び鞭を振りかぶった。しばらくの間、絶叫が響き渡っていた。



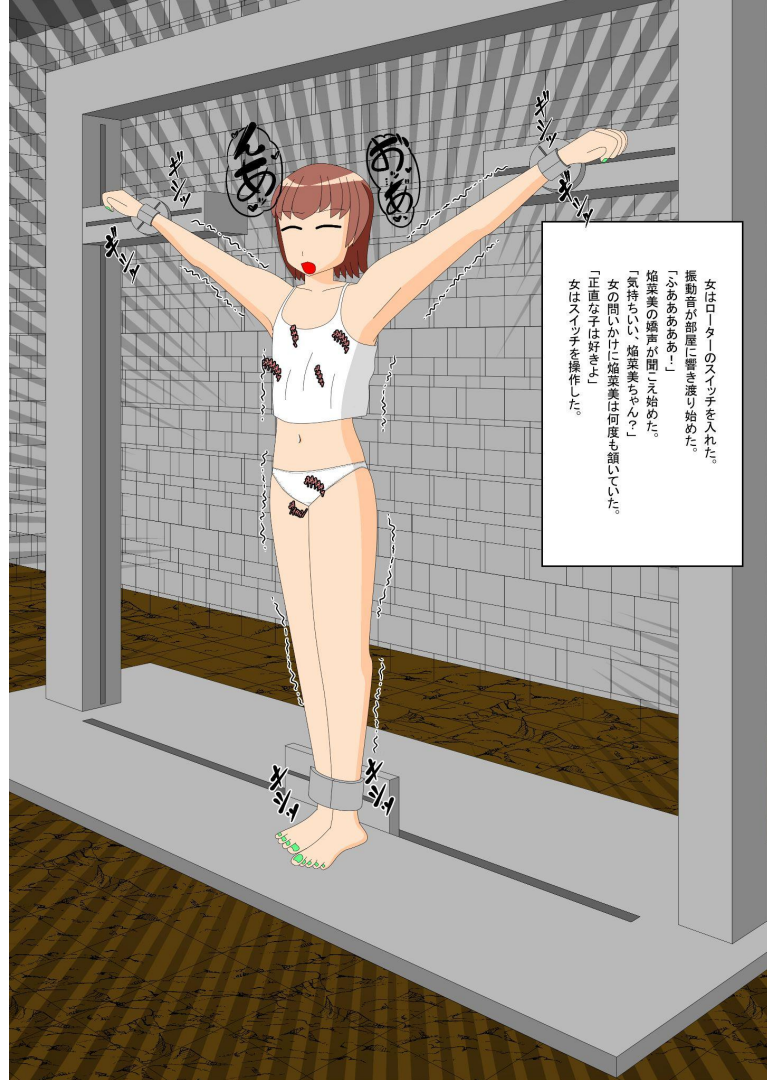
「うっ……」
独房に戻された焔菜美はぐったりしていた。
両手には革手錠が巻かれ、両足も枷で拘束されていた。
焔菜美は横になることすら許されず、
鎖に吊るされた革手錠に身を預けていた。
「あじ……これからどうなるの……」
虚ろな瞳で焔菜美は呟いていた。

「うっ……」

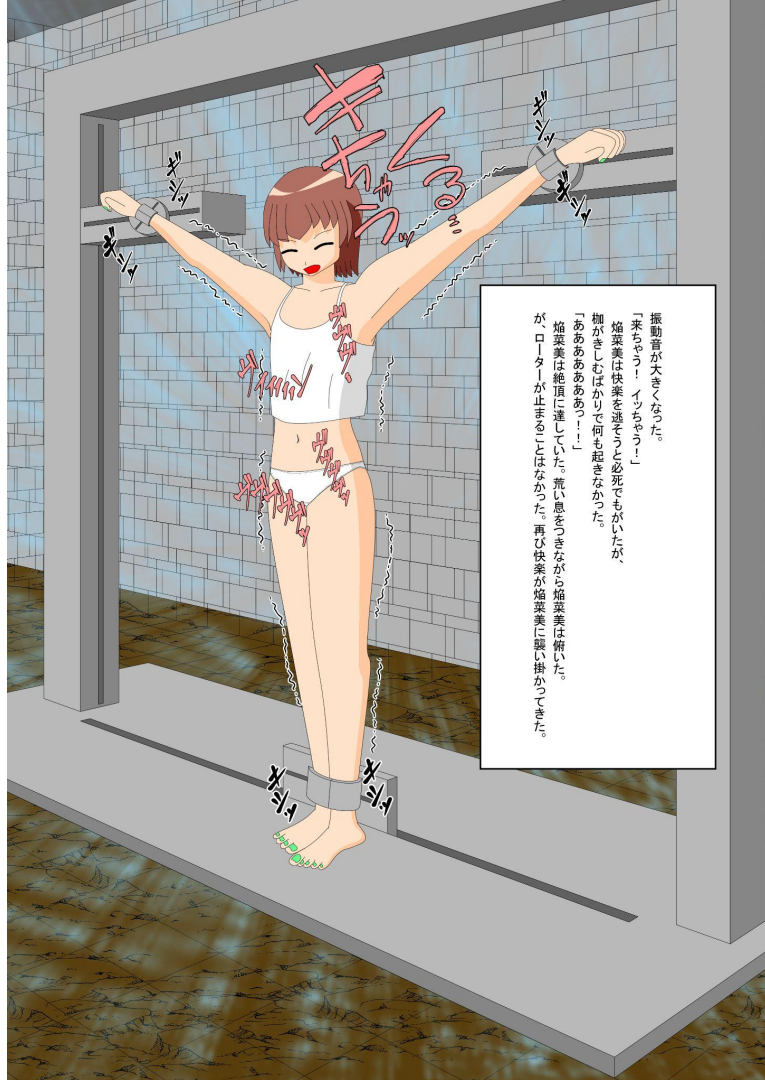




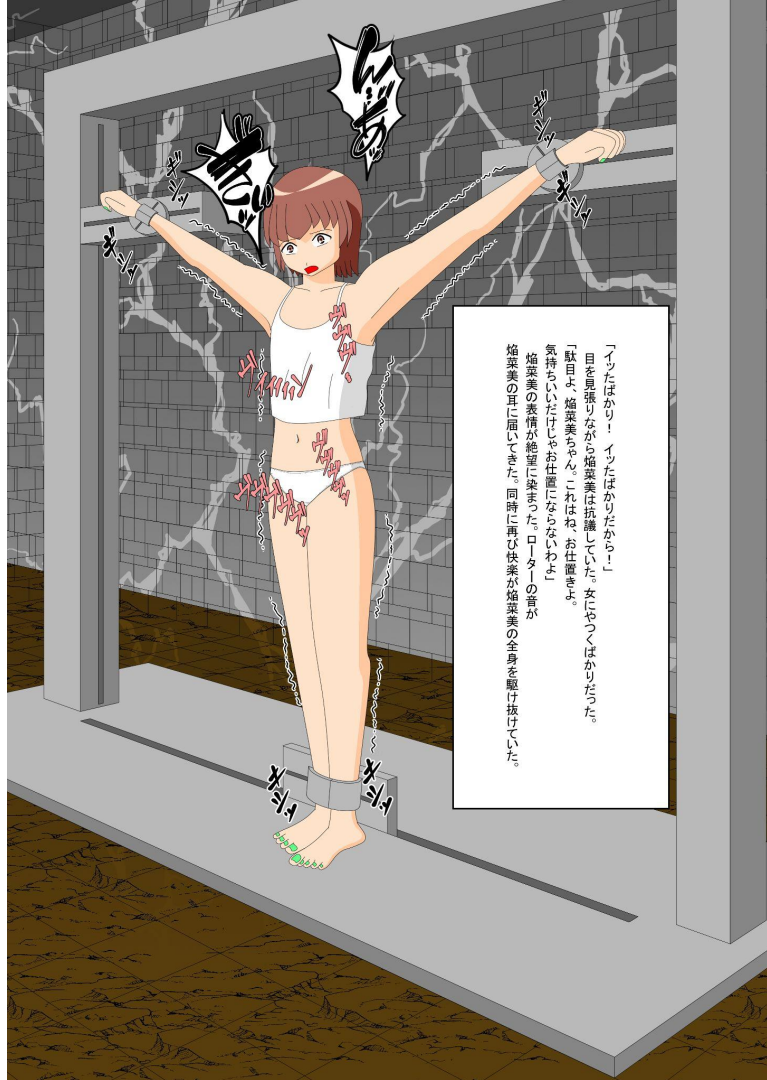
かわいらしいそがあらわになった白無地のキャミソールと
白無地のショーツというシンプルな下着姿で焰菜美は、
頭の高さまで両手を上げられた状態で寝にされていた。
「焰菜美ちゃん、お胸とクリにローターをつけ終わったわよ」
焰菜美は女を睨んだ。
「そんなに睨まないで、それに、焰菜美ちゃん欲しがっているでしょ」
一瞬焰菜美は目を見張った。女はそれを見逃さなかった。
「スイッチを入れるわね」



女はローターのスイッチを入れた。
振動音が部屋に響き渡り始めた。
「ふあああああ！」
焰菜美の嬌声が聞こえ始めた。
「気持ちいい、焰菜美ちゃん？」
女の問いかけに焰菜美は何度も頷いていた。
「正直な子は好きよ」
女はスイッチを操作した。



振動音が大きくなった。
「来ちゃう！ イッちゃう！」
焰菜美は快楽を過ごと必死でもがいたが、
枷がきしむばかりで何も起きなかった。
「あああああつー！」
焰菜美は絶頂に達していた。荒い息をつきながら焰菜美は俯いた。
が、ローターが止まることはなかった。再び快楽が焰菜美に襲い掛かってきた。



「いったばかり！ イッたばかりだから！」
目を見張りながら焰菜美は抗議していた。女にやつくばかりだった。
「駄目よ、焰菜美ちゃん。これはね、お仕置きよ。
気持ちいだけしお仕置にならないわよ」
焰菜美の表情が絶望に染まった。ローターの音が
焰菜美の耳に届いてきた。同時に再び快楽が焰菜美の全身を駆け抜けていた。

女達は楽しそうに話していた。

「焰菜美ちゃん、遊びがいがあるわね」

「そうねえ、耐久力あるし、何より拘束されるのが好きみたい」

「そろそろ独房にいる間も、下着姿でいてもおっつかい」

女達は焰菜美の処遇を決めていた。

それは、焰菜美の境遇が「屑苛酷になる」ことを表していた。

